

富山 如大地

— 第134号 —

このたび、教区会議長に就任されました洲上議長に揮毫いただきました。

発行人 発行所 富山市総曲輪2丁目8-29
辻森 正顯 真宗大谷派富山教務所
編集 富山教区如大地編集委員会

電話 076-421-9770
教区・別院ホームページ <http://toyama.higashibetsuin.com/>
教務所アドレス toyama@higashihonganji.or.jp



五色の幔幕まんまくが張られた富山別院

2013年10月ごんしゅう厳修の富山別院報恩講にて

境内の莊嚴しょうごん

御別院の本堂に五色の幔幕まんまくと紫幕しまくが張られ、境内に五色の仏旗ぶつきが立てられると、御別院の今年度の報恩講が始まるのだな、またお迎えするのだなと、何かワクワクとした高揚感があります。そして、明年にお迎えする宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要においても、境内を始め総曲輪通りにも五色の仏旗がはためく中、呉東一円各地より門信徒が参詣され、人々で溢れている事と想像し、思いを馳せています。

この五色の幔幕・仏旗・吹き流しが「なぜ五色なのか」との質問がありました。仏教では、重要な儀式、説法教化が執行される時にこれを立て「知らせ」としました。

五色は、仏入涅槃の時、その仏身より発したまえる六色の光明に倣かたどって制定し、仏教の旗章となったもので、仏身より出たる色で仏徳を表すものです。

六色の根本出所の『涅槃經ねはんぎょう』の「第一序品」には、「この光に遇えば、罪苦煩惱一切消除す」とあります。この五色の幔幕と仏旗で莊嚴された中に身を置き、宗祖の御遠忌にお参りしたいと思えます。

※五色、五正色（青・黄・赤・白・黒）
六金色（青・黄・赤・白・淡紅・五種の混色）
幔幕・仏旗の五色（青・黄・赤・白・緑）

第十組 正覺寺 犬島孝昭

富山教区・富山別院 宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要
【法要期間】2014(平成26)年5月23日(金)から25日(日)まで
【御遠忌テーマ】私は何を願って生きるのか? — 親鸞からのメッセージ —

富山別院報恩講（二〇一三年十月六日～八日）法話

若き親鸞聖人の苦悩

同朋大学教授 中村 薫氏 かおる

本年も富山別院では、十月六日から八日まで二昼夜にわたって報恩講が厳修されました。本誌では、講師の中村薫氏（同朋大学教授）のご法話を掲載させていただきます。

このたびは、ご縁をいただいて、愛知県の一宮からやってまいりました。

現在、同朋大学の教員をさせていただいておられます。そして、養蓮寺というお寺の住職をさせていただいておられます。今回、皆さんと一緒に考えてみたいと思うことは、親鸞聖人のご生涯において、お若い頃どんなことに悩み苦しんで、そしてその身を生きていかれたのかということをご三日間にわたって聞いていただきたいと思います。

親鸞讃歌

金子大榮先生が作られた「親鸞讃歌」という詩があります。今から五十一年ほど前、御本山の親鸞聖人七百回御遠忌の時に向かって、自らお書き下さった詩でございます。これをこの二、三年、ずっと拝読させていただいているのですけれども、とても味わい深く受け止めております。

昔、法師あり
親鸞と名づく
殿上に生まれて庶民の心あり
底下となりて高貴の性を失わず

已にして愛欲の断ち難きを知り
俗に帰れども道心を捨てず
一生凡夫にして
大涅槃の終わりを期す

人間を懐かしみつつ人にしたしむ能わず
名利の空なるを知りて離れ得ざるを
悲しむ

流浪の生涯に常楽の郷里を慕い
孤独の淋しさに万人の悩みを思う

聖教を披くも、文字を見ず
ただ言葉のひびきをきく
正法を説けども、師弟を言わず
ひとえに同朋の縁をよろこぶ

本願を仰いで
身の善悪をかえりみず
念仏に親しんでは
自から無碍の一道を知る

人に知られざるを憂えず
ただ世を汚さんことを恐る
己身の罪障に徹して
一切群生の救いを願う
その人逝きて数世紀
長えに死せるが如し
その人去りて七百年
いまなおいけるが如し

その人を憶いてわれは生き
その人を忘れてわれは迷う
曠劫多生の縁
よろこびつくることなし

〔親鸞讃歌〕金子大榮

黒坊主

皆さんの正面が阿弥陀如来様、その向かって右側の御厨子の方が親鸞聖人です。一休さんが親鸞聖人について、襟巻の暖かそうな黒坊主

こいつの法は天下一なり
と歌を詠んだと伝えられております。
親鸞聖人の御眞影ごしんかげをよくご覧になると
わかりますが、白い襟巻を巻いておられます。お年寄りのお坊さんになると、

寒い冬に内陣でお勤めするときには、襟巻を巻いてもいいそうです。

「黒坊主」というのは、黒衣・墨袈裟のことです。お坊さんにはいろいろな色の装束、衣があります。聖徳太子が「冠位十二階」をつくられ、位を色でわかりやすく表されました。それに倣ったのです。以前は堂班・衣体といって、お坊さんの位も衣の色で分けていたのです。お坊さんたちは色衣のために一生懸命に頑張りました。人間の欲ですね。ところが親鸞聖人は、黒衣・墨袈裟です。「黒」というのは染まらないうということ。この法は天下一なり」とは、こいつの言うことは間違いない、一級品だということ。す。



講師／中村 薫氏

1948（昭和23）年愛知県生まれ。同朋大学文学部教授、博士（文学）、名古屋教区養蓮寺住職、擬講。著書『華嚴の浄土』、『中国華嚴浄土思想の研究』、『親鸞の華嚴』、『日中浄土教論争』など。

親鸞聖人の生まれた環境

親鸞聖人という方は、一一七三（承安三）年四月に、京都の日野の里で生まれました。と伝えられております。親鸞聖人が四歳の時に、お父さんの有範という方が隠遁されます。「隠遁」というのは、今でいえば蒸発と言ってもいいでしょうか、家からいなくなってしまったということ。亡くなってしまうのか、どういう事情かはまだ定かではありません。そして八歳の時に、お母さんの吉光女が亡くなります。

最近、浄土宗西山深草派のお坊さんたちが『親鸞は源頼朝の甥』（白馬社）

という本を出されました。たいへん分厚い、文献的にもいろいろ調べてあります。吉光女が源頼朝の姉でなから

うかという説があります。ということ、親鸞聖人は源頼朝の甥にあたるというの、最近いろんな文献から出てまいりました。それが正しいか正しくないか、それはここでは問題ではないので、そういうことがあるということだけ聞いておいてください。

いずれにしても、どうもこの日野家は、源氏の側についていたということだけは間違いないようです。一一七三年というのは、ちょうど平清盛が隆盛を極めている時代でございます。「平家にはあらざれば人にあらざるなり」と言われるくらいに、平家一門が隆盛を極めていました。そして「壇ノ浦の戦い」で平家が敗れ、源頼朝が鎌倉幕府をつくるのが一一九二年でございます。親鸞聖人が十九歳の頃に鎌倉時代に入るわけです。ということは、親鸞聖人の生まれ育った時代背景を見ますと、平安の末期で平家一門が隆盛を極めて、源氏がまだ出てくる前の時代でございます。その時代に親鸞聖人のお家は日野家、源氏の側についていたので、その当時で言えば羽振りはあまり良くないのです。元々日野家は、

御所で会議があったときに、いろんな書類を作る役目の家だったそうで、宮廷に仕える身分であったと思います。「日野家」というのですから、当時、苗字があるというのは、やはり貴族の家にお生まれになったということでしょう。

四歳の時にお父さんがいなくなり、八歳の時にお母さんが亡くなります。それでおじさんの家に預けられるわけです。普通でしたら、跡取りであれば、その家は継がれていてもいいはずなのですが、それでも、弟さんもみんな一緒に得度されました。つまり、日野家、親鸞聖人の家は滅亡してしまったという事です。時代状況は大変なことなので、それが親鸞聖人の生まれた環境でございます。

何一つ選べない

私たち一人一人もそうですけれども、思い通りなことは得られないのちをいただいています。それはどういふことかと言いますと、何一つ自分の都合、思い通りにならず、この世にいのち

をいただいているのです。何一つ選ばなかったのです。具体的に申し上げますと、この中でお父さんお母さんを選んで生まれてきた方はおられますか。気が付いたら、この人がお父さんでこの人がお母さんであった、というのが私たちのいのちでしょう。ですから、中には「生んでくれなんて頼まんのに勝手に生んで」とか「親父が他の人だったら良かったのに」とか、文句が出て当然であります。何一つ選べないので。しかし、気が付いたら生まれてきたというのが、私たちのいのちであります。

いのちの出発は、何一つ自由を選べなかったのです。例えば、日本人を選んで生まれてきた方はおられますか。男女を選んで生まれてきた方はおられますか。環境もそうですね。時代・社会、誕生には後から付いてきて気が付いた話です。何月何日に生まれようなんて生まれてきた人は、一人もいないのです。国家・民族・社会、すべての事柄がオギャーと生まれた後に、気が付いて知ったのです。

人間は二本の足で立ち上がるように

なったのですが、四つん這いでなく、歩き始めたのです。そうすると、女性の人の体の骨盤から産道が、物理的に狭くなったそうです。そのため、どうしても人間は未熟な状態でなければ生まれてこれないのです。牛や馬は、産み落とされたら、そこで立ち上がるそうです。立ち上がらなかつたら生きていけないのです。動物というのは、本能的に立ち上がります。ところが、人間だけは未熟で生まれてくるのです。ですから、必ず先に生まれた人の世話にならないと生きていけないのが、人間の本性です。産婦人科をしております私の友達に聞くと、人間の赤ちゃんがオギャーと産まれ、へその緒を切った後、産湯にもつけずにそのまま外に放っておいたら、一日で死んでしまうそうです。皮膚呼吸ができないし、体温が下がってしまったら生きていけないそうです。つまり、必ず先に生まれないのが人間だそうです。

教育の「育」という字の上半分は、もともと子どもがひっくり返ったという字だそうです。下の「月」という字

は、お月さんではなく「にくづき」です。ですから、「腰」や「肩」や「心臓」はみんな「にくづき」が付きます。「育」というのは、寝ている子どもが起き上がって育つということです。だから、この「育」というのは、育つ人と育てられる人が必ずあるということです。だから一人で育っていくのですけれども、育てられるのです。だから教育というのは、教え込むことではないのです。一人で人間が成長していくのを助けていくのが教育であり、保育なのです。

寝ている子どもが立ち上がっていくには、どうしても一年近くかかるのです。「這えば立て、立てば歩めの親心」で、先に生まれた人からおむつを替えてもらったり乳を飲ませてもらったり、世話をしてもらって、人間というもの、また生き物すべてかもしれないけれども、育っていくのです。ということ、は、今ここにいる私たち一人一人が、意識があるかないかは抜きにして、全員がおむつを替えてもらって乳を飲ませてもらって、今ここに生きているのです。これは間違いないでしょう。

「俺一人で生きていく。誰の世話にもならない」。そんなことはあり得ないことがわかりただけでしよう。そうしてみると、そのことをうっかり忘れていたら、私たちは、言葉は的確ではないかもしれませんが、恩知らずかもしれない。自分一人で大きくなってきて「俺が、俺が」で頑張っている私がいるのですが、実はそうではないのです。先に生まれた人からいろんな世話をされて大きくなってきたのです。そしてまた、人の世話もするのです。それが人の「間」に生きる「人間」であるのでしよう。

その人間である私たちがオギャーと生まれたその瞬間から、何一つ選べなかったのです。ここに私たちの悩みや苦しみの出発があるのです。何一つ自由にならないのです。

「今」

親鸞聖人は九歳のときに、日野の里から牛車に乗って青蓮院に行き、そこで出家得度をされたと伝えられております。得度をしてくださったのが慈円じえん

和尚、天台の座主に四回なった方です。

この方は、法然上人にとでも帰依された関白・九条兼実の弟にあたります。

親鸞聖人が青蓮院に着くと、夕暮れになってしまいました。「今日は日が暮れたから、得度は明日にしよう」と、慈円和尚が言ったのです。そうすると、まだ松若丸という幼名だった親鸞聖人が、短冊に歌を書かれたと伝えられております。その歌が、

明日ありと思う心のあだ桜

夜半に嵐の吹かぬものは

これはどういうことかと言いますと、桜の花が満開に咲いているので、明日こそ花見に行こうと思っても、それは全く当てにならないということです。

明日はわからないということですが、なぜかと言いますと、夜中に大雨が降って、大風が吹いたら散ってしまうのが桜の花です。私たち一人一人のいのちも「今ですよ」ということです。

最近、テレビに出ている予備校の講師が「今でしょう」というのが流行りました。大事なことは「今」であって、

明日のいのちもわからないということですが。ただ今、この時だけが確かです。

から「得度をしてください」と言っていて、ロウソクの灯りの下に得度をされたのが親鸞聖人だと伝えられております。

「今してください」と仰ったと伝えられております。大事なことは「今」です。そのいのちは、今なのです。おそらく私たちは、少し鈍感になってきたのか、あるいはいのちに対する畏敬の念が無くなったかどうかわかりませんが、けれども、思いの中では、平均寿命が何歳で、あと私は何年生きられるかわからないけれども、まだ死なないという、そんな思いで日暮しているのではないのでしょうか。我々は「後生の一大事」を心に掛けて、仏法を聴聞しているのでしょうか。

大変な時代

繰り返しになりますが、親鸞聖人は、今から八百四十年くらい前、平安時代末期の一一七三年にお生まれになられました。その頃はどのような状況であったかをご紹介します。鴨・長明の『方丈記』

という書物の中に、当時の京都の状況が事細かく出てきます。

一一七七（安元三）年、親鸞聖人が四歳の時に、「安元の大火」で京都の町の三分の一以上が焼けてしまいました。その後、一一八〇（治承四）年、親鸞聖人が七歳の時には「辻風」（現代の突風・竜巻）が京都の町を襲います。それから、一一八一（養和元）年から二年間にわたって起こった養和の飢饉では、食べ物が無く、大勢の人が飢え死にしていたのです。親鸞聖人が八歳の時です。天変地異が大変な時代だったのです。

昔は、火を焚くのに薪や焚き物が必要で、そういうものを買っていました。その当時焚き物を買うと、中には金箔や漆が混ざっていたものもあったそうです。空き寺に入って仏像を盗み、それを割って薪にして売っていた人がいたということです。そういう時代だったのです。私たちが手を合わせる御木像も誰かが作ったもので、元をたせば木ですけれども、信仰の対象として大切なものでしょう。その仏像を盗んで割り木にして売らなければならない時

代とは、どんな時代だったのでしょうか。生きていくにはそうせざるを得なかったのでしょうか。

養和の飢饉の時、仁和寺の隆曉法因というお坊さんがお弟子を連れて京都の町を周り、その中で死んでいる人一人一人のおでこに阿弥陀の「阿」を梵語で書いて行かれたのですが、それを数えると四万二千三百人にもなったそうです。二ヶ月で京都のただけで四万二千三百人の人が野垂れ死にしているのです。牛や馬も倒れて死んでいるのです。異臭がただよう京都の都でした。それが養和の飢饉で、大変な時代です。

私は、親鸞聖人はこの光景をご覧になったと思うのです。『改邪鈔』という書物の中で、

某親鸞閉眼せば、賀茂河に入れて魚にあたうべし

『改邪鈔』真宗聖典 六九〇頁

と出てきます。私が死んだら「賀茂河に捨ててくれ」と仰ったということです。親鸞聖人がどういうことを仰るのかな

と書いていたのですが『方丈記』を読んだでこの時代のことを見ますと、賀茂河は死人の捨て場所だったのです。土葬であろうが火葬であろうが、葬儀をしてもらえるという人は、身分の高い人の一部なのです。普通の人たちは野垂れ死にして捨てられていくのです。二ヶ月の間に四万二千三百人が亡くなりました。そんな状況をご覧になって、親鸞聖人が晩年にそう仰ったのです。「屠沽の下類」という群萌と共に生きたのが、親鸞聖人でしょう。名も無き人々と共に、民衆と共に生きた親鸞聖人の証が、その様な言葉の端々に表れるのでしょうか。

ですから、権力に対しては徹底的に批判をされていたのが親鸞聖人だったのです。『教行信証』という書物を書き残されたのは、当時の仏教界・天皇家・権力者に対して、親鸞聖人は許せなかったからなのです。念仏弾圧で罪の是非も問わずに住蓮・安樂を打ち首にされ、師の法然上人、そして親鸞聖人も島流しにされてしまうのです。九十歳で亡くなるまで、個人を怨むとか怨念ではなくして、自分が生きてい

く証は「ただ念仏の正法」、これを守るためには命懸けだったのです。

「信」

私たちの信心の中に、迷信という「信」もあります。この迷信の「迷」という字は、「米」と「しんにょう」です。屁理屈ですけれども「米食って走りまわっている人間」が迷うのだからです。ここにいる我々が迷うのです。よく勘違いされていますが「先祖の霊が迷っているかもしれないから、住職さん、お経を読んでくれ」と言う方がおられました。それは間違いなのです。亡くなった人は仏ですから迷わないのです。迷っているのは「先祖が迷っているかもしれないからお経を読んでくれ」と言ってきたその人なのです。「迷信」という信があって、それから「傍信」という信もあります。これは「傍らに信ずる」という事です。「まあ、念仏でも信じておこうか。念仏でも申そうか」ということです。ですから、正月になれば神社へ行って神様に拍手打って、通う機会があれば新

興宗教にも走るし、不安になれば占いもするのです。お盆になれば、先祖供養で精霊流しをするかもしれないのです。十二月になるとクリスマスもしますし、三十一日になったらお寺で鐘をゴーンと撞いて「南無阿弥陀仏」と称えるのです。そして、その足で神様に拝みに行つて、商売繁盛・家内安全・無病息災・延命長寿をお願いするので、傍らに信じているのです。これはよそごとではなく、私たちの日常でしょう。だけど親鸞聖人や蓮如上人は、そういうことをしっかり分けられたのです。「念仏を捨てようが捨てまいが、あなたの自由です。私は南無阿弥陀仏一つで十分です」と言われたのです。「念仏申して地獄へ落ちて、法然上人の教えを聞いて地獄へ落ちて後悔しません」と、そのように徹底したのが親鸞聖人、蓮如上人なのです。それがいつの間にか、傍らに念仏でも信じておこうか、報恩講になったらお寺に参つて南無阿弥陀仏と、そうしながらも、他の所へも平気で行きますというのが「傍信」なのです。

もう一つは「邪信」です。邪に信

じ込んでいくことです。人間は弱者ですから、うそか本当かわからなくなってしまうのです。今の宗教の中には、マインドコントロールと言いまして、精神的に洗脳していく宗教があるので、ある意味、宗教家と詐欺師は紙一重です。洗脳してしまうのです。そしてそれを信じてしまうと邪信、邪であつても、正しい信がわからなくなってしまうのです。そして邪信に陥ると、今度はもう誰の言うことも聞かず、狂ったように信じてしまうのです。これが「狂信」です。足の裏を診てもらった、へそを診てもらったり、もう一千万出すと「癌が治るぞ」と言われたら、出してしまふのです。お金があるから出すのですけれども、なければ出せないのですから、それも人間の迷いの一つです。

たくさんある「信」の中で、親鸞聖人は「正信」ということを明らかにしてくださいました。『正信偈』の「正」というのは「一つに止まる」という字です。「二つない」ということです。あれもこれもではなく「一つ」なのです。フラフラしてしまうような我々な

のではないのでしょうか。「南無阿弥陀仏」一つで十分だと言い切っていくのです。これが真宗門徒の証であったのです。ところが今、いろんな知識が入り、いろんな情報が入ってきますと、不安になって「ただ念仏、それだけで大丈夫かな」、「もっといい方がいいなあ」とか、いろいろ迷ってくるのです。外から見て客観的になれば判断できても、中に入り込んでしまったら、何も見えなくなってしまうのです。それが人間の迷いの深さなのです。その中で親鸞聖人は「正業」・「正信」、この事を生涯懸けて頭かにして下さったのです。

まあ、さてありなん

親鸞聖人は大変な時代を経て、本願念仏の教えを頭かにして下さったのです。親鸞聖人は二十九歳の時に、比叡の山を降りられたのです。そのときに

雑行を棄てて本願に帰す

〔『教行信証』真宗聖典 三九九頁〕

と仰ったのです。「雑行」というのは、自力聖道のいろんな修行です。例えば、千日回峰行をしたり、滝に打たれたり、いろんな修行をするのです。それから、お経を何回も何回も読んで勉強したりするのです。それらを棄てて「本願に帰す」と仰ったのです。「もう私は迷わない。今日から弥陀の本願を信じて念仏申す。それが私の生涯の生き方だ」と、二十九歳のときに決心されたのです。

親鸞聖人は三十五歳の時に、承元の法難で島流しに遭って、その後京都へ一度帰られたのですけれども、法然上人が亡くなったことを聞かれ「もう都へは帰らない」と言われて、大陸の国（今の茨城県）の方へ行かれたのです。四十二歳の時に、佐貫というところで疫病が流行ったのです。養和の飢饉と同じ様に、大勢の人が死んでいくのです。それを目の当たりにして親鸞聖人は、二十九歳の時に「雑行を棄てて本願に帰す」と誓ったのに、居ても立ってもいられずに、お堂に籠って浄土三部経を千回読誦し、祈願に立ったのです。ところがハッと気が付かれた

のです。お経を何回読んだとしても、それで死んでいく人が助かるということとはありえない、それこそ迷信・邪信・狂信であろうと、そのことに気付いてやめるのです。そして民衆の中に入って、手を握り、念仏の教えを説いていくのです。

そして五十九歳の時に、今度は親鸞聖人自身が四十度近い熱にうなされるのです。その時に、夢の中で三部経を千部読誦していたというのです。「如是我聞」「我聞如是」の一字一句がきれいに覚えてきたそうです。そして三日経って、「まあ、さてありなん」と仰ったというのです。今の言葉で言う「とまあ、そんなもんだなあ」ということです。奥さんの恵信尼がそれを聞いて「殿、どういうことですか。寝言、うわごとですか」と聞くと、親鸞聖人は「私は二十九歳のときに『雑行を棄てて本願に帰す』と決心した。しかし、その自分が四十二歳のときに三部経読誦をしようとした。その時にハッと思っ、て、そういうことは決別したはずのこの私が、五十九歳の今、熱にうなされて三部経を千部読誦しておった。そ

れが人間の自力のはからの根強さよ」と仰ったのです。「阿弥陀さんにおまかせして、本願他力回向によって『南無阿弥陀仏』で救われていくのだということを百万遍聞いて、なるほど納得しても、また出てきた」ということです。親鸞聖人は正直な、素直な方じゃないですか。皆さんは、親鸞聖人もあろう方がと思われるかもしれないけれども、「人間親鸞」そういう迷い、苦しみの中で生きていかれたのです。

わかっちゃいるけど

皆さん、植木等々さんをご存じですか。あの方のお父さんは、植木徹誠という高田派のお坊さんです。植木さんの「スーダラ節」の中に「わかっちゃいるけどやめられない」という言葉が出てきますが、この言葉についてお父さんが「これは真宗だぞ」と言ったそうです。「お前のやっていることはいい加減だけれども、この『わかっちゃいるけどやめられない』のが人間の本性だ」と言われました。「わかっちゃいるけどやめられない」という身の事実

です。

私は、糖尿・痛風・不整脈などいろいろな病を抱えています。毎日の生活を正しく過ごし、運動もして、あまり肉やおいしいものを食べてはいけないのですが「わかっちゃいるけど」ついつい食べてしまうのです。タバコを吸う人も、パチンコ依存症の人も「わかっちゃいるけどやめられない」のです。煩惱具足の凡夫の身であるという、そのことが「わかっちゃいるけどやめられない」のです。その言葉について、植木さんのお父さんが「念仏の教えだぞ」と言われたのです。

そのことを親鸞聖人は「まあ、さてありなん」（そんなもんだなあ）と仰ったのです。仏法は頭じゃありません。念仏の教えというのは、毛穴から入るのです。ないものねだりではなくて、今こうしてここに座って、念仏申す身にさせていただいているのです。そしてこのことが喜びなのです。皆さんは、これ以上何を願ってここに座っているのですか。このことが尊いのです。あとは、飯が食えんようになれば、死ぬのです。与えられる間は生かされてい

くのです。その事実生きるということとです。

愛欲の広海

重複しますが、親鸞聖人がお生まれになりました頃の京都の時代背景は、大火・地震・竜巻がおこり、養和の飢饉では京都の碁盤こぼの目の中だけで二ヶ月の間に四万二千三百人が野垂れ死にしているという時代でした。その後、源氏と平家が争う源平の争乱によって、京都は大変な状態でありました。それが親鸞聖人の育った社会です。

そして親鸞聖人には、家庭的な問題がありました。親鸞聖人が四歳の時にお父さんの日野有範が蒸発してしまわれたのです。そして、八歳の時にはお母さんの吉光女が亡くなってしまったのです。世が世なら、そのまま跡継ぎができたのでしょけれども、親鸞聖人の日野家は源氏側についていたのです。お母さんの吉光女は源氏の出と言われており、最近では源頼朝のお姉さんではないかという説もあります。当時は「平家にあらざれば人にあらざる

なり」という時代ですので、おそらく宮廷に仕えることもできなかった状況で、親鸞聖人は九歳の時に出家得度され、比叡山に入られます。この九歳の出家得度というのは、異例中の異例であります。十五歳で出家得度するのが比叡山の習わしでありました。それから二十二年間、親鸞聖人は比叡山で苦勞しながら勉強され、麒麟児と呼ばれるほど優秀だったそうです。ところがその二十年の間、いくら勉強しても心の中が晴れやかにならない。問題が二つあったのです。

一つは、親鸞聖人のお言葉を借りま

すと、
悲しきかな、愚禿ぐとくらん、愛欲の広海に沈没ちんもつし

〔教行信証〕真宗聖典二五一頁

この「愛欲」は人間の愛、男と女の問題、性の問題です。その問題について「深い海の中に沈んでいくがごとく」と仰るのです。出家した場合は、男と女の関係を断たなければなりません。誤解のないように聞いていただき

たいのですけれども、当時の比叡山は、全部ではなく一部ですが、表と裏が違っていた人もあったのです。

それはなぜかというところ、源氏と平家の争いで敗れた天皇家の一族の人たちが出家得度します。当時は天皇になるか天台の座主ざすになるかが、出世頭だったのです。明治になると「末は博士か大臣か」となりますけれども、この時代は「天皇か天台の座主か」が出世頭だったのです。ですから、天皇家の一族や貴族の多くの人たちが、比叡山に入ってきたのです。中には二十歳を超えてから入って来た人もいたそうです。そういう人たちの中には、夜な夜な祇園や坂本の遊郭へ通う人もいたのです。表向きは清僧ですけれども、夜になったら祇園や坂本に行つて、酒や女と戯れていた人もいたのです。二十歳過ぎて山に入ってきた人は、酒の味を知っているでしょうし、女性との経験がある人もいたでしょう。やはり我慢ならなくて、ついつい夜になってそういうところに行ってしまったということもあったでしょう。

ところが親鸞聖人は、表と裏の使い

分けができなかった方のようです。これは私の解釈です。親鸞聖人は一本気でしたから、女性が恋しいけれども、今は修業の身であるので一生懸命にがんばるけれども、やはり湧き出てくる性欲が抑えられないのです。そういう男と女、これは自然なことでしょう。それを仏教では断じなければならぬというのが原則です。

肉食妻帯

高田派に伝わっている『親鸞聖人正明伝』という親鸞聖人の伝記がありまして、その中にある話ですが、親鸞聖人が二十七歳のある時、比叡の山へ帰ろうとして赤山明神せきざんみょうじんまで来ました。その時「親鸞様、親鸞様」と呼びかけられたのです。振り向くと、綺麗な女性がいました。「親鸞様、私も悩み多くあります。私も仏様のお話を聞きたいと思いますので、比叡の山へ連れて行ってもらえませんか」と言うのです。しかし、当時の比叡山は女人禁制です。女性差別と言えばその通りの時代社会です。ですから男性でないと入れません。

それで「だめです」と親鸞聖人が答えるのです。潔癖ですから断るのです。するとその女性が『涅槃經』には「一切皆悉有仏性」とあり、この世に生まれた人はすべて仏になれる種を持っている、仏になれる人はいないと書いてあります。『法華經』には「變成男子」とあり、女性も男性も救われることが書いてあります。それなのに、どうして比叡の山は男だけなのか。山にいるお猿さんや鹿や鳩はみんな雄ですか」と言われたのです。

これには親鸞聖人は、たじろいでしまいます。雄と雌、男と女、これは世の中の自然でしょう。「両方お互いに救われて初めて本当の仏教が開かれるのではないのですか。どうか私にも仏法を聞かせて下さい」と言って、その女性は姿を消していきます。ちらっと見たらウサギがびよんぴよん跳んでいった、という話です。その女性は、後に親鸞聖人の妻となったという説もある玉日たまひであると言われていますけれども、よく分かっていません。親鸞聖人は悩み悩み、そして六角堂の参籠で『御伝鈔』に「女犯偈」とい

う形で出てまいりますけれども、救世観音が「我は菩薩となってあなたの体に入り、交わりを経てあなたと共に救われていきましよう」という夢を見られたのが親鸞聖人です。それで、愛欲の広海に沈没する身であるけれども、親鸞聖人は公に肉食妻帯をされたのです。実は南都のお坊さんたちも、七堂伽藍の外れにある庫裏くらに女性を囲っていたのです。表は独身ですけど、裏では女性を囲っていたのです。親鸞聖人は公に肉食妻帯されたのです。妻を娶っていかれたのが、親鸞聖人の苦悩の末の生き方なのです。

法然上人のお言葉を綴った『和語灯録』という本があります。その中にこんなくだりがありました。これは親鸞聖人とは限りませんが、あるお坊さんが、「私は妻を娶ろうと思うのですけれども、いかがでしょうか」と法然上人に聞くのです。そうすると法然上人のお答えが、「妻を娶って共に仏法を聴けるなら、どうぞお貰いなさい。妻を娶って仏法を聴けないようなら、おやめなさい」と、こういう言葉が出てまいります。

親鸞聖人は生涯かけて、恵信尼と仏法を聴聞されていかれました。親鸞聖人最後の三十年間は別居です。恵信尼さんは越後、親鸞聖人は京都で、別々に生活されました。ですから、親鸞聖人は三十年間独身でいて、三十年間恵信尼と共に暮らして、三十年間は別居の教えを聴き、お互いを菩薩としてあがめ合いながら生きていた夫婦が、親鸞聖人と恵信尼でございます。肉食妻帯ということを初めてされたのが親鸞聖人です。

名利

そしてもう一つ、親鸞聖人が悩んで苦しまれたのが、名利なまりということ。地位・名誉を含めて「俺が、俺が」という根性です。皆さん、この世で一番かわいい、一番大事な人は誰ですか。妻ですか、夫ですか、子どもですか。よくよく考えてみたら、己が一番かわいいのではないのですか。私は人に言われて動くのが大嫌いな

のです。連れ合いから「ああしろ、こうしろ」と言われると、ムカッ腹が立ちます。そのくせに、人には私の言うことを聞かせたいと思います。やっぱりですね。人の言うことは聞きたくないけれども、人には言うことを聞かせたいのです。だから家族の者が「お父さん」、「おじいちゃん」と言ってくると「本当に生きていいいな」と思います。しかし、無視されると、孤独を感じますね。それぐらい己が可愛いのです。「俺が、俺が」となるのです。無視されることほど辛い、寂しい、悲しいことはないのです。

そういう中で、名利というのはなかなかなくならないのです。歳を取ってきたら、頑固爺、意地悪婆さんの根性が無くなるかというと、そうではありません。歳と共に婆さんは意地悪になるし、爺さんは頑固になっていくのです。もういい加減にお浄土に近付いてきたから、心安らかに「おかげさま」「ありがとう」、「南無阿弥陀仏」で生きていければいいですけども、そうはいきません。

私が勤めております同朋大学の研究

センター「知文会館」の中の柱に、こういう張り紙がしてありました。「腹立たば 鏡の前に立ってみよ 鬼の姿がただで見らるる」。腹を立てぬようにと「腹」という字を横向けにしてありました。

一言思うことが適わないと腹が立つという事です。皆さんここで報恩講のお参りをして、今日一日は心安らかに日を送る、それは大事なことです。しかし、誰かが自分の靴を履いていたら、腹が立ちますよね。いつでもどこでも、すぐ腹が立つ用意をしているのです。煩惱具足の凡夫のこの身、これが身の事実です。生かされている身です。「おかげさまで」「ありがとうございます」という心になかなかないのです。

煩惱具足の凡夫

親鸞聖人が悩まれたのは、「身愚神闇」・「心塞意閉」・「不従人心」・「違逆天地」です。これらの言葉は、『大無量寿経』というお経の中に出てまいります。「身愚神闇」は、身は愚かに

して、精神が暗闇に閉じ籠ってしまいうこと事です。「心塞意閉」は、心と意識が閉じ籠ってしまいうこと事です。「不従人心」は、人の心に従えない、人の言うことが聞けないということ事です。「違逆天地」は、天と地、つまり自然、世の中の事柄に逆らっていくということ事です。これは、現代の科学文明なのです。

私が子供のころ、婆ちゃんが「おてんとさまに申し訳ない」とよく言っていました。天と地の恵みによって、自然の中に生きているのが人間なのに、まるで人間が自然を征服できるがごとく振舞っているのです。これが、原子力発電所をはじめとする現代の科学なのです。人間の幸せのために造ったはずの物が、多くの人たちのいのちを奪い、苦しめる物になってしまった。それが「違逆天地」なのです。

こういう人間のことを親鸞聖人は「煩惱具足の凡夫の我が身」と仰ったのです。だから、今日まで悪いことをしなかったのは、決して私の心が善いからではありません。縁があれば、どんなことでもするかもしれないのが、

この私です。難しい言葉で言うと、さるべき業縁しうえんのもよおせば、いかなるふるまいもすべし

〔歎異抄〕真宗聖典 六三四頁

と言うこと事です。「人千人殺せ」と言われても殺せないけれども、殺すなど言われても殺すかもしれない、この我が身であるということ事です。親鸞聖人は、己の分別かんべつ・名利・はからい、それらの中で苦しまれ、名利と愛欲の広海の中で苦しまれたのです。しかも、九十歳で亡くなるまで「煩と申すは身が病むなり。悩と申すは心が病むなり」と自覚されていかれました。身と心が病んでいったのです。そのところにメスを入れたのが仏様の教えなのです。今日から凡夫をやめて明日から仏になるというような器用なものではないのです。限りなく凡夫に帰るのです。凡夫の身を知ることが大事なのです。世界でたった一人の「私」です。いのちいっぱい生きていただきたいのであります。阿弥陀さんは、皆さんに「よう来たな」と言っておられるので

す。「ゆっくりしていけよ、よう来たな。ここがあなたの故郷だよ」と言っているのです。我々が家へ帰るとき、阿弥陀さんは「行って来いよ」と仰るのです。我々の家を「火宅^{かたく}」（火で燃えている家）と言いますが、これは煩惱であり、「俺が、俺が」と燃えているのです。皆さんが今、この顔で毎日生活されたら、きっと家族は和気あいあいになると思います。しかし、この別院から一步出て、「ただいま」と家に帰ったら、角が出るかもしれない我が身なのです。家から「行ってきます」

と言って出てきたのです。それで別院へ来たら、阿弥陀さんが「お帰り、ゆっくりしていけよ」と、そしてここから帰るとき「いってらっしゃい、帰ってきなさいよ」と仰るのです。私とお寺の関係、日常生活と故郷の世界、両方が私たちの生活なのです。この場も大事だけでも、日常生活も大事なものであります。そういうことで、お念仏はないものねだりではないということ、最後に申し上げて、終わらせていただきたいと思えます。

初晨朝法話（十月七日）

いのちの寿命はいくばくぞ

これから申し上げるのは「いのち」ということです。普通、我々がいのちというと、生命など肉体的ないのちと、もう一つは仏様のいのち、無量寿^{むりょうじゆ}あるいは寿命と「寿」という字を付けておきます。

お釈迦様は、ある時食事をしながら、

三人のお弟子に質問をなさいました。「汝、いのちの寿命はいくばくぞ」（あなたはおとどれくらい生きられると思えますか）とお釈迦様は問われたのです。すると、最初のお弟子は「もちろん、来年のいのちもわかりません。しかし、一週間ぐらいは大丈夫でしょう」と答えました。そうすると、お釈迦様は「汝、今だ道を得てそうらわじ」

（あなたは、まだ本当のことをわかっておりませんよ）と仰いました。

二番目のお弟子に、同じ質問をされました。二番目のお弟子は「明日のいのちもわかりません。しかし今こうして食事をして、お釈迦さまと語っている今日このひと時は大丈夫でしょう」と答えました。すると、お釈迦様は「汝も今だ道を得てそうらわじ」と仰いました。

三番目のお弟子にも同じ質問をされました。すると、三番目のお弟子は「阿吽^{あうん}の呼吸でございます」と答えました。「阿」というのは吐く息です。「吽」というのは吸う息です。吐く息と吸う息のどちらかが途切れたときに、私のこの肉体的いのちは終わります。つまり、「阿吽」というのは刹那^{せつな}、一瞬という意味です。一呼吸、一呼吸が私たちのいのちであり、いつ死んでも不思議でないのがこの私のいのちであるのです。それも一瞬です。明日もわからないけれども、一呼吸、一呼吸が私のいのちであるのです。このように三番目のお弟子が答えると、お釈迦様は「そうだ、吐く息、吸う息のどちら

かが途切れた時に私のいのちは終わっていくのだよ」と仰いました。

生命倫理の世界、お医者さんなどの世界で脳死・臓器移植ということが問題になりました。医学や科学が進歩してきたおかげで、臓器を移植できるようになりました。この臓器を移植するということは、脳死の間に、まだ臓器が生きているうちに提供できれば一番いいわけです。ですからお医者さんとしては、脳死を死として認めて欲しいというのが医学の世界なのです。

ところが、お釈迦様の世界で言うところ、脳死は死ではありません。人間の死というのは呼吸死、心肺停止です。脳死であってもまだ生きているのです。仏教では呼吸死なのです。阿吽の呼吸の間、一瞬一瞬の間が私たちの確かないのです。後はみんな私たちの思いなのです。

過去・未来・現在

「三世^{さんぜ}」ということ聞かれたことがありますか。過去・未来・現在を三世といいます。普通私たちが考える時

間概念は、過去・現在・未来でしょう。ところが仏様は過去・未来・現在と仰っておられます。過去と未来は、実は「思い」なのです。過去に生き、未来に生きている私たちの生き方は、みんな「思い」なのです。ただ現在のみが身の事実なのです。今日ただ今、「ここにいる」、これだけが事実なのです。過去のことを色々思い、未来のことを心配し、色々なことを考えるのは「思い」なのです。私たちが悩んだり苦しんだりするのは、ほとんどが過去と未来のことに捉われるから、悩みや苦しみがあるのです。

皆さん、今日までの人生はすべて満足しておられるでしょうか。わが人生に悔いがない。今日までこうしているのをいただいて生かされ「ありがたい」「もったいない」ことであると同時に、日常生活の中では、あの時に「こうすれば良かった。ああすれば良かった」という思いが、悩みや苦しみになってくるのでしょうか。未来に対してもそうでしょう。

特に今日の時代社会を考えてみると、私たちにすれば、よそごとではないで

しょう。現実的には電気は無くても生きていけるけれども、放射能に汚染されたら生きてはいけません。十万人とも二十万人とも言われる福島の人たちが自分の家へ帰れないのです。そういう現実を我々が共に抱えているのです。これを仏様は「共業」と申しまして、我々が共に背負っていかなければならぬ問題であると仰っているのです。「業」とは「行為」のことです。それ

に対して、一人一人が背負っていかなければならぬ業があります。それを「不共業」と言うのです。一人一人の環境はそれぞれですから、一人一人が背負っていかなければならぬ人間の悩みや苦しみがあります。それと同時に、地球全体で人事としては放っておけない業もあるのです。

最近、踏切で老人が倒れていて、それを助けようとして亡くなってしまった方がおられました。人間というのは思いで生きていますけれども、身でも生きているのです。とても尊い行為をされました。かといって「人の為、世の為に死んでいけ」というのも怖い話です。ただ我々は、この過去・未来の

思いに悩んでおりますけれども、生きているのは身の事実なのです。死ぬのも生きるのも身の事実なのです。

親鸞聖人のお言葉を借りれば「どのような死に方をしようが、驚くべきことでない」と仰るのです。人を助けようとして、自ら亡くなってしまった、悲しいし辛いし、寂しいけれども驚くべきことでないのです。それは「生死一如」の世界で生まれたら必ず「死ぬ」のちであるということなのです。

逆の話で、もう生きていたくない、死んでしまいたいと思うとします。これは「非有愛」といって、人間の煩惱の一つであります。人間というのは死にたくないという欲（有愛）と、死んでしまいたいという欲（非有愛）と、二つの欲を持っているというのです。その二つの欲のバランスがうまく取れているから、我々は今生きているのですけれども「非有愛」が強くなったら、自らのいのちを絶つのが人間であるのです。

お念仏の教えというのは、煩惱具足の我が身であるけれども「いつ死んでもよろしい。いつまで生きてもよろし

い」という決断なのです。これがお念仏の世界なのです。死んでも死にきれない、これが我々の凡夫の世界です。

死というものを聞いた瞬間から、悩みがもう未来に対して始まっていくのです。しかし、身の事実は、今ここに腰掛けて、念仏の教えを聞かせていただいていることしか確かなことはありません。でもその心によって、我々は身が悩み、苦しみ、振り回されていくのです。ですから、この問題は心をどうするかということが大事なのですけれども、仏様は身が大事だと仰るのです。今日、話を聞いて「今晚あたり救われるだろう」というのは、それは寝ぼけた話なのです。分かったか分からないかどうでもいいのです。今、ここにいるこの事実、そういうご縁をいただいたことをまず喜ばせていただきたい。ここから出発でございます。「汝、いのちの寿命はいくばくぞ」。私のいのちは一瞬一瞬、いつ死んでも不思議でないということです。いつまで生かされても不思議でない私のこのいのち、仏様からいただいたいのちでございます。

結願晨朝法話 (十月八日)

脈々と続いているいのち

いのちの歴史についてお話をさせていただきます。いのちは一体、どれくらいの高さを持って、今日まで脈々と続いているのでしょうか。『御文』では「無始曠劫」(始まりがないずっと昔)という言い方をされています。ところが、科学者の色々な証明によりますと、銀河系宇宙が誕生して百億年経つそうです。そして、この地球が誕生して五十億年という、とても長い時間です。そして、この地球上にいのちの元が誕生して三十億年経つそうです。三十億年前から今日まで、一度も途切れることなく脈々といのちは続いているのです。これが科学者の説であります。近代の科学的なことは違いますが、それでも、このことを今から二千五百年前にお釈迦様は「いのちは平等で一つだ」とはっきり申しておられます。ダーウィンの進化論によりますと、私たちが人類の祖先はお猿さんと、皆

さん聞いているでしょう。お猿さんの前は何だったのでしょうか。聞いてみますと、生き物はすべて海の中から誕生したそうです。東京大学のある学者は、人間の祖先のルーツの元の元はヤツメウナギだと言っていました。ヤツメウナギの稚魚の形と、人間の赤ちゃんが体内に宿った時の、まだ手足が出来る前の形が同じだそうです。そして、私たちはオギャーと産まれてくる前まで、もちろん意識や記憶はありませんけど、お母さんの羊水の中で十月十日、つまり水の中で生きてきたのです。ですから、私たちの体は五割から六割以上は水分なのです。それから塩分、これは海の中から出てきた元でしょうね。少しの塩分と水を補給しなければ生きていけないのです。もちろん、食べ物を食べなければエネルギーになりませんけれども、二、三日何も食べなくても人間のいのちがあります。いのちの元が一方では草になり、一方では木になり、一方では鳥になり、

一方では動物になり、色々進化して今日の人間という形を持っているわけです。極端な例を出して比較してみると、私は六十五歳の中村薫という人間であり、体重は七十キロです。私と同じ体重の豚を私と一緒に百度から二百度で焼きますと、骨が残ります。私は人間の形に、肋骨や頭蓋骨などが残ります。豚も豚の形の骨が残ります。二千度から三千度で焼いてしまったら、骨も灰になるそうです。そうすると、灰になったものを混ぜてしまうと、人間か豚か分からなくなってしまうのです。これは元素に帰るのです。もともとの元素に帰っていけば、人間も豚も同じなのです。生き物はすべて同じになっています。ですから、お釈迦様は「いのちは平等に尊いのですよ」と仰っておられます。皆さんは蚊を殺したことがありますか。それは殺生です。仏様に「蚊や蠅は殺して良いですか」とお聞きしたら「無用な殺生はしてはいけません」と仰っています。ところが私たちが人間は分別といいます、分けて色々と差別しております。東京の松崎さんという方の



話です。二、三十年前、電信柱に張り紙がしてあり、そこには「蝶々やトンボの戻ってくる町にしましょう」と書かれてありました。東京では蝶々やトンボが見られなくなってしまったのでしよう。そして別の所にも張り紙があり「蚊やハエのいない町にしましょう」と書かれてありました。別々に見ていると、それぞれ「なるほど」と思うのですが、松崎さんはこれを結びつけたらアレツと思ったのです。蚊やハエは人間にとっていけない害虫であって、蝶々やトンボには戻ってきて欲しいのです。私たちは無意識の中に、好きなもの・嫌いなもの、善いもの・悪いものという風に生き物を差別していくのです。しかし、お釈迦様は「いのちは平等である」と仰っています。

人身受け難し

いのちは、三十億年前から脈々と続いている。氷河期であろうが何であろうが途切れずに、脈々と続いてきているのです。そういう「いのちの歴史」

の中で、たまたま、人間としてのいのちをいただいているのが私たち一人一人です。この私のいのちは、必ずお父さんお母さんを縁として、いのちをいただいているのです。お父さんとお母さんにも、それぞれお父さんお母さんがいることはわかりますよね。そうすると私は、父方と母方と、二人のおじいちゃんと二人のおばあちゃんの四人の人のいのちがあったから、私が生まれてきたのです。これを三十代まで遡るのですが、三十代といっても知れています。親鸞聖人が生きておられた頃まで遡るのです。何人の人のいのちがいると思いますか。二の三十乗で、十億になるのです。私が生まれるまでに、八百年から千年遡るだけで、十億人という人の脈々としたいのちがいるのです。大おじいちゃんが結婚してなかったら、私は生まれてこないのです。お父さんお母さん、おじいちゃんおばあちゃんまでは、我々は認識できますよね。でも、四代、五代、六代前はわかりませんよね。だけれども、この中に脈々といのちが続いてきているのです。今でいえば「DNA」です。そういう、

脈々と続いている「いのちの歴史」です。

そういう意味で言えば、ここに生きていくということ、いのちをいただいたということは、不思議なことだと思いますか。人間が子どもを作るということはとんでもない間違いで、子どもというのは授かりものなんです。昔は「子宝に恵まれる」という言い方をしました。その子どもを授かるという確率を考えてみますと、医学的には精子と卵子が結合して、妊娠するのですが、その場合に、一回の射精における精子の数が、三億五千万から五億四千万だそうです。仮に五億四千万としますと、五億三千九百九十九万九千九百九十九の兄弟を蹴落としてたどり着いたのが、この私だそうです。仏教的に言うところ「人身受け難し」です。それぐらい人間に生まれるというのは大変なことなのです。一回の性交で授かることは言えませんので、無限的な中から私が生まれるのです。ですから、善導大師は「父母の精血をもって外縁となし、自の業識をもって内因となし、因縁和合して生まれるのですよ」と仰っています。

ます。物理的、医学的に言えば、精子と卵子が結合するのですけれども、確率が大変なことです。

お父さんお母さんを縁とし、生まれ難くして生まれてきた私。脈々と続いた何億という人のいのち。人類二百万年まで遡れば、もう天文学的数字になります。その中で、私たち一人一人生きていくのです。そして、七十億以上の人が今いるそうですけれども、私と同じ人は一人もいません。私は世界でたった一人の、この私なのです。その私のいのちはまた、脈々と続いているのちの中に、今生きているのです。しかし、その私も必ず「死ぬいのち」なのです。その「死ぬいのち」を今、生かされているのです。だから、一日一日が大事ないのちになっているのです。そういう事を「いのちの歴史」を通じて仏様は教えて下さっているのです。

同朋会運動寄稿

同朋会運動——その底にあったもの

第十二組 明源寺住職 辻 俊明氏

同朋会運動について、今号から二回にわたり、辻俊明氏に寄稿していただきます。明年、富山教区・富山別院の宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要をお迎えするにあたり、改めて同朋会運動の歴史に学びたいと思います。

はじめに

真宗大谷派において同朋会運動がスタート（一九六二【昭和三七】年）して、今年ですでに五一年を過ぎようとしています。

同朋会運動スタートの年、私は大谷大学大学院一年であったが、その前年の春の四月には、宗祖親鸞聖人の七百回御遠忌が賑々しく厳修され、更に同年八月には曾我量深師が大谷大学学長に就任されている。私はたまたま谷大で仏教青年会活動をしていたため、各種研修会への参加と共に、全国の青壮年層の皆さんと語り合う機会に恵まれ、富山の田舎では経験できないような「清新」なものを感じていたものです。御遠忌法要では、この時初めて音楽法要が厳修され、団体参拝者の案内を

しながら、私は御影堂前の白洲で感激して聞いたものです。また、御遠忌記念行事として岡崎会館の大ホールで、鈴木大拙・曾我量深・金子大榮三師の公開講演会や吉川英治・円地文子の公開講演会も開催され、満堂の聴衆を集めて好評でありました。同朋会運動はそのような動きの中で、新しい「教団づくり・人づくり」としてスタートしたと言えましょう。

真宗同朋会—住職の手引き—

まず初めに、同朋会運動を振り返ってみようとする時、「住職の手引き」として出されていた当時の次の文を見おきたいと思えます。

真宗同朋会とは、純粹なる信仰運動である。

それは従来単に門徒と称していただけのものが、心から親鸞聖人の教えによって信仰にめざめ、代々檀家と言っていただけのものが、全生活をあげて本願念仏の正信に立っていただくための運動である。

その時寺がほんとうの寺となり、寺の繁昌、一宗の繁昌となる。

然し単に一寺、一宗の繁昌のためものでは決してない。それは「人類に捧げる教団」である。世界中の人間の真の幸福を開かんとする運動である。

（『真宗』一九六二（昭和三七）年十二月号）

この文の趣旨は、ややもすれば名のみ形のみになっている門徒・檀家の方たちと共に、あらためて宗祖親鸞聖人と真向かいに向き合って本願念仏の教えを聞き開いてゆこうというものでありましょう。

実際に御遠忌終了後は、同朋会館を研修道場として各種奉仕団が全国から引きも切らずであったといえます。実際私の近くのお寺さんも、高齢でご本人は行けないが、奉仕団を年二回も募集して駅まで見送っておられました。

「本山に行ってくる」と門徒さんたちの顔色が違うんですよ」と。そしてこの頃、「家の宗教から個の自覚の宗教へ」

という言葉がよく語られていました。

同朋会運動発足の背景—原点—

それにしても、「真宗同朋会とは、純粹なる信仰運動である。」（住職の手引き）と言いつけられている背景、原点となるものは何であったのか？

それはやはり、清沢満之師から曾我量深師へと展開した、求道姿勢と自覚的な教学を精神的支柱とする信仰運動であったろうと思います。まずそれを少し見ておきます。

清沢満之師（一八六三【文久三】年〱一九〇三【明治三六】年・四一歳）は、その四一年の苦難に満ちた壮絶な生涯を通して、自己を問い自らの信念・信仰の確立を成し遂げていった方であり、実験・実行の求道姿勢を以って真宗の教えを自覚・自証していった方であるといえましょう。『絶対他力の大道』（明治三五年六月発表）、『他力の救済』（明治三六年六月発表）、『我が信念（我は此の如く如来を信ず）』（明治三六年六月発表）等は、単なる説明ではなく、まさに実験を通じた自覚自証の信仰告白であり、読む人に深く感動を与えるものであります。

『絶対他力の大道』（一部抜粋）

自己とは他なし絶対無限の妙用に

乗托して、任運に、法爾に、此の現前の境遇に落在せるもの、即ち是なり。(中略)

請うなかれ。求むるなかれ。なんじ、何の不足がある。もし不足ありと思わば。是れなんじの不信にあらざるや。

『他力の救済』(一部抜粋)

我、他力の救済を念ずるときは、我が世に処するの道開け、我、他力の救済を忘るときは、我が世に処するの道閉づ。

そして『我が信念』は、清沢師の絶筆といわれるものであり、「私の信念とは、私が如来を信ずる心の有様を申すのである」と言い、

第一に申せば(中略)私の煩悶苦惱が払い去らるる効能がある。(以下略)

第二(中略)私の智慧の窮極であるのである。(中略)私の信念には、私が一切のことについて私の自力の無効なることを信ずる、と云う点があります。この自力の無効なることを信ずるには、私の智慧や思案の有り丈を尽くして、その頭を挙げようがない様になる、と云うことが必要である。これが甚だ骨の折れた仕事

でありました。

その窮極の達せらるる前にも随分、宗教的信念はこんなものである、と云う様な決着は時々出来ましたが、それが後から後から打ち壊されてしまったことが、幾度もありました。論理や研究で宗教を建立しようと思つて居る間は、この難を免れませぬ。

何が善だやら悪だやら、何が真理だやら非真理だやら、何が幸福だやら不幸だやら、一つも分かるものではない。我には何も分らないとなつたところで、一切の事を挙げて、とごとくこれを如来に信頼する、ということになつたのが、私の信念の要点であります。

第三。(中略)私の信ずることの出来る如来というのは、私の自力は何らの能力もないもの、自ら独立する能力のないもの、その無能の私をして私たらしむる能力の根本本体が、すなわち如来である。(中略)この私をして、虚心平気に、この世界に生死することを得しむる能力の根本本体が、すなわち私の信ずる如来である。私はこの如来を信ぜずしては、生きても居られず、死んで往くことも出来ぬ。(以下略)

と述べ、再度、

私の信念は大略この如きものである。第一の点よりいえば、如来は私に對する無限の慈悲である。第二の点よりいえば、如来は私に對する無限の智慧である。第三の点よりいえば、如来は私に對する無限の能力である、かくして私の信念は、無限の慈悲と無限の智慧と無限の能力との実在を信ずるのである。(中略)私の信ずる如来は、来世を待たず現世において、すでに大なる幸福を私に与えたもう。(中略)ゆえに、信念の幸福は、私の現世における最大幸福である。これは私が毎日毎夜に実験しつつある所の幸福である。来世の幸福のことは、私はまだ実験しないことであるから、ここに陳べることはできぬ。(以下略)

長い引文になりましたが、清沢満之師の求道的実験を通した信念・信仰告白の一端であります。

恩寵主義のいひ

清沢満之門下生の中に恩寵主義に流れる方々もあつたといひます。恩寵的傾向は清沢満之師自身の晩年の表白からも出てくるものであります。ただし清沢師自身の言葉は、当時の結核という不治の病氣と相次ぐ二人の

子供の死、妻の死などの逆縁の中で、自問自答の内省を通して表白されている言葉でありました。

また信仰・信心においては、いかなる状況にあつても自体満足・現在安住が求められる、ということがあります。『絶対他力の大道』などは、その典型であると言えましょう。極限状況のよくな時にも、なおそれを如来の大恩として満足し引き受けてゆく、ということです。

暁烏敏師も一時、恩寵主義的信仰にあつたといわれます。

私は世の中の一切の出来事は、順逆共に如来が私に託したまふ恩寵と喜ばして頂いて居る。私は讃めらるる時に如来の恩寵を感じると共に、誇られる時にも如来の恩寵を喜ぶのであります。(略)私は、私を道に誘つた師友の上に如来の恩寵を感じると共に、私を罪惡に導いた友人の上にも如来の恩寵が喜ばるのであります。(以下略)

(『罪惡も如来の恩寵なり』)

しかし、後に『更生の前後』の文では、

私が先生(清沢師)の御在世の間

から、特にその後になってだんだんと感激的に仏陀を崇拜し、現在の境遇より慈悲の存在を説明しようとした私の仏陀は、妻の死と共に、いやがおうでも私の心から消えねばならぬようになりました。自分は罪深い者であるが、この罪の深い私をこのままで抱き取ってくださるといふ都合のよい仏陀の恩寵は、私から消えたのでありません。(中略) 妻の死と共に客観界に顕現すると思うた仏陀、丁度キリスト教徒のゴッドというておるような超絶的仏陀はないのであるとわかりました。

〔暁鳥敏全集〕第二巻(三十頁)

一般に私どもの間でも、「ありがた」「尊い」「おまかせ」などと語られる信仰の表現が有りますが、曾我量深師(一八七五【明治八】年〜一九七一年【昭和四六】年・九七歳寂)の次の言葉は、それを認めたくえで、なお厳しく恩寵主義を超えた信心の世界を述べてゆかれます。

如来の大慈悲を語るもの多し、而も如来を無限の智慧と知るもの甚だ少し。

信仰は単なる感情ではない、単なる感謝ではない、単なる熱涙ではない、信心は知恵である。

されば如来の智慧海に入るとは深く自己の現実相を知ることである。かくて自己の現実の罪業を知る所の機の深信は、是れ如来の智慧海の実験である。

〔暴風駛雨〕

暁鳥師は非常に感情の豊かな方であり純な方であったのでありましょう。正直に隠さずに自分の心の歩みを述べてくださっています。暁鳥師の一時期の恩寵主義的信仰のことは、後の私たちにとっての貴重な実験であったといえます。

暁鳥師は後に、七百回御遠忌の十年前、恐らくその人徳と全国的知名度を頼りとして、求められて宗務総長に就任されたことがあります。その時の宗議会の挨拶で

宗門護持のためには、財力を要するは申すまでもないが、それは正信念佛の心から湧き出てくるものと信じております。

私達は、一にも信心、二にも信心、三にも信心、どこまでも信心爲本の骨折によって、すべてが解決されてゆくものと信じております。

教務所も、別院も、末寺も、すべてが法施の場所と信じておりますから、各自が心を一つにして自行化他

の道に精進をして下さい。

「一にも信心・二にも信心・三にも信心」という言葉は有名であります。とにかく情熱的で捨身の方であったといえましょう。

願の世界——曾我量深師

曾我量深師の言葉に

我々は、自分の了解しないことでも、これはすでにわが浄土真宗の教えであるからそう言わなければならぬ、そういう責任があると、こういうように思うのであります。

いかに浄土真宗の教えであっても、自分が了解しないことを了解しておる如く粧うて、言ったり書いたりする、そのことにこそ、我々は深い責任を感じざるを得ないのであります。(「清沢満之先生(一)」『教化研究』十六号)

こういう厳しい言葉のところ、曾我量深師の求道の学びの姿勢があると見えましよう。

これは、曾我師が清沢満之師の実験実行・自覚自証の姿勢を讃える中で述べられたものと伺われます。これを私どもに引き当てる時、経典や仏語に日々

ふれる寺院生活でありながら、まことに申し訳ないというより他ありません。曾我量深師は清沢満之師の求道姿勢と課題を受け止めながら、更に深く真宗の教えを思索し展開して行って下さった方でありました。

曾我師の本で、私の大事にしている本に『本願の仏地』(昭和二年・五十一歳講話)があります。昭和八年の初版本の「序」では、

私は嘗て『救済と自證』の問題について聊か考究に勉め来ったが、それは信が従果向因して、内に展開する所の「願の世界」の問題に帰入すべきであることを知った。

と述べ、また昭和二四年一月の再刊本の「はしがき」では

此の書は、如来の本願を罪悪生死の自覚の中に求め得たる、なつかしき最初の記念である。

と述べられている。内容は実に密度の濃いものであり、そこには、「帰命と願生」「回向の意義」「浄土」「宗教的要求」「伝承と自覚」「罪悪自覚の意義」「機の深信と往還二相」「法蔵菩薩の内観」等々、真宗を学ぶ者にとって震えるようなテーマが次々に語られていま

す。例えば「願に満足する生活」の章では、

純粹宗教の信はそれ自身に宗教的理性、自分を反省し自分を批判するという智慧・光を備えている。信が信自身を反省したところの世界が願の世界である。

信というものの経験事実としては現在に満足している。現在与えられたところに満足し感謝している。

しかし信は信自身を内に反省し、批判する。そういうことによって、そこに要求の世界、祈りの世界、願の世界というものが内に現われてくる。それを「宗教的信が内に展開する願の世界」と名づけるのである。即ち宗教の信の世界というものは願というものであります。

純粹な宗教の願というものは、不満なるが故に願うのではない。現在に満足しつつ要求するところの要求である。純粹宗教の願というものは、要求そのものが純粹であるから、其の要求そのものに満足している。それが宗教要求・願の特別の性質である。(一部取意)

このような真宗の「信と願」の内面的展開の思索が、やがて昭和三六年・先生八五歳の七百回御遠忌記念講演の

講題「信に死し願に生きよ」に、展開していったものといえましょう。

真宗者の運動——和田稠師

和田稠師の「真宗者の運動論」も、曾我師の信と願の思索等と、深いところでつながっているように思われます。和田師は「救済の現在性」を語る中で、宗祖の「正定聚の位につく」とか「不退の位につく」という言葉をふまえながら「運動が成就するとは、どういうことか」という問いをたてて、

今成就しない運動を何十年やっても、どうってことはない。人間の歴史を見よ、ということになります。人間が地上に出てから願いを持って生きてきたはずです。しかしその願いはいつ成就するのか。成就するとしたら今、この現実の只中で成就するということが、事実として確信されるということがなければなりません。

真宗者の具体的な現実の運動がもしあるとすれば、信心の発動です。信心の発動ということは、浄土に生まれる者が娑婆において活動するわけです。娑婆において活動しとれば、やがて浄土に生まれるだろうという運動とは、本質的に違うんです。

真宗の運動というのは、浄土に生まれる者が、浄土にいいよ生まれ続ける。その生まれ続ける運動がそのまま現実の課題に取り組んでいくという運動になるんだと。

どこにも救いのないような現実の中で、信心は常に展開し続けておる。往生の歩みが止むことなく続いておるということでしょう。それを明らかにしなければならぬと思うんです。真実の救済というものは娑婆を離れるのだと。

運動さえすればよいというもんじやない。それが信心の運動であるかないか。そういう問題を、それこそ運動を通して深めていかなきゃいかんと思うんです。そうでないと真宗者の運動にはならない、——と。(以上 一部取意)

真宗者の信心と運動についての、大変含蓄の深いお話しであります。

曾我量深師の「社会改良に就いて」

ただしかし、曾我量深師の『本願の仏地』において、私としてはどうしても納得のいかないことも語っておられます。それは「社会改良に就いて」の章で、「社会を改良するなどという問題は永遠に起きて来ない」とおっしゃっ

ていることです。その所のお話しをやや取意的に紹介して見ますと——。

法蔵菩薩の四十八願は、必ず穢を捨て浄を欣うところの本願であり、そういう選択本願には現実の世界に對して如何なる関係を持ち、如何なる意義をもっているのか、と問いを出して「私は非常に深い関係を持っていると思う。」と述べられる。

その例えとして、道楽息子とその父親の話がされます。道楽息子を良くしようと思って父親が種々に諭すが、諭せば諭すほど息子は反抗し墮落する。そこで方向転換して父親は静かに自分を反省してゆくと、とてもお話にならないような自分が見えて来た。息子の間違った見方は、そもそも自分の間違った見方の鏡でないか……。そうして自分の悪い点が明らかになってくると、息子のよい点が次第に明らかになってくる。この心持が形に現われて来た時、反抗していた息子が、我を折って立派な息子に変わってきた……。と。

つまり自分を善者だと無批判である間は向うも悪い点が見える。すると息子は次第に悪人になる。逆に自分の悪い点が明らかになれば、息子の良い点が明らかに輝いて来る。(以上 取意)

「こんなことは実際困難なことではありません。しかし実際道理を考えれば、そういうことではないかと思えます。」
と、

今日は、社会改良とか、いろいろのことを申しますが、私は、社会改良などというものは、それも結構でありますけれども、一体社会というものには自分の反影でありまして自分の醜い心の反影が悪い社会として現われてくる。自分が善い者だと思っただけで社会改良などということをやっているのではあるかと思えます。一度自分を醜いと思う、自分の醜い姿は自分に現われずして社会に現われる。社会の醜さを以て自分の醜い姿を見るべし、かくの如く自分の醜い姿を見て来ましたときに社会は美しく輝く。社会を改良するなどという問題は永遠に起きて来ない。

自分の欠点を欠点と感ずることが浅いならば、社会は不完全である。けれども自分の欠点を真実痛切に知るならば、社会というものは、いよいよ完全に輝いてくるのである。本当に自分を責め、真実に己を反省する時に、社会全般というものが、なら改良されるべきところではなく、改良せられた立派なものであるとい

うことを知ることが出来るであろう。
(中略)

この宗教的信が内に本願を展開して、浄土を内に荘嚴する。内に浄土を荘嚴するということは、つまり自分を本主に責めること、自分を本主に見つめていくこと。自分の内面に願を展開してゆくという道は、ただ目前にそういうものを描き出して来るのでなしに、切羽詰って、自分の汚れを痛切に本主に自覚するところ、そこに浄土本願というものは無辺に、その内に展開せられてくるだろうと思われまふ。

そういうことによつて自分の内面を清浄にして、そうして自分の内面において、清浄の浄土というものをそこに荘嚴せられるのであろうと思ふのであります。それが即ち社会を改良するところの原理であり方法であり、正しいところの唯一の道である。

『本願の仏地』

曾我量深師は自己の依つて以つて立つところの信心を、更に内省的に深められて、一個の人間における信と願の交際を、「信が内に展開する願の世界」として、本書の『本願の仏地』で語られているわけです。そこでは機の深信に象徴される罪惡自覚の徹底が、決定

的要因とされます。そこにおいてこそ本願にふれ、本願に生きる歩みが始められる、そしてそこに人間としての生活が始まる、と。「それが即ち社会を改良するところの原理であり、方法であり、正しいところの唯一の道である。」と、おっしゃるのであろうと思ひます。(これは引文の後半部分の私見です)。しかし親子の例えから社会改良の不要論を展開されるお話しに対して、これをお読みになる方々は、どのように受け取られるでしょうか？

初めの親子の例話は、家庭や友人の間でも時には語られる話であります。しかし人間と社会となると、「社会は自分の心の反影である」というだけで済むだろうか。尊敬する先生の言葉であります、やはり無理でないだろうか……？

この時のお話しは昭和二年のことです。江戸時代以来、一般大衆が社会状況を改良変革しようなどとは考えられもせず、それが即社会的大罪と見なされる時代が続いたわけです。そういう空気が恐らく昭和の戦中戦後の或る時期まで続いたのでなかったでしょうか。

曾我師が後年(昭和四五年十一月四日)差別発言をなさつて『異なるを嘆く』の文を書いておられますが、例えば被差別部落とその歴史は、個人的な

意識を超えて歴史的・社会的にさまざま要因によって作られて来たものであり、またそれを意識的・功利的・条件的に利用してきた国民大衆があったわけです。「真実に己を反省する時社会は何等改良されるべきところではなく、改良された立派なものである」とは、決していえない現実と歴史があつた筈であります。

更にいえば、一九二二(大正十一)年三月三日、全国水平社創立大会が京都で開催され、差別されてきた歴史をふまえて、「宣言」文が発表されました。「人の世に熱あれ、人間に光りあれ。」と叫ばれた。その同年四月に、曾我師は、京都の大谷大学の教授に就任されている。本書『本願の仏地』はそれから七年余りした一九二九(昭和二)年十一月頃の講話であります。水平社の全国大会のことなど全く存じなかったとは思えません。むしろ社会改良に関する引文の「今日は、社会改良とかいろいろのことを申しませんが」の言葉の中に、被差別部落の人たちの叫びも入っていたのではないかと、思われる訳であります。

清沢満之に対する評価と批判

曾我量深師の「社会改良に就いて」を考えようとする時、もう一度清沢満

之に対する評価と批判を見ておきたいと思えます。

清沢師に対する評価と批判は、当初より宗門内外に有り、特に教団問題が深刻化してきた一九六九（昭和四四）年から一九九〇（平成二）年頃にかけて清沢批判はピークを迎えたといえます。つまり、教団混迷の信仰的思想的責任を負うものとして、近代教学の代表としての清沢批判が保守派や大谷家側から出され、呼応するように西本願寺系の歴史学者からも出されたといえます。まず評価することとしては、

一般社会では

- ① 明治期の日本最初の宗教哲学者
- ② 仏教近代化の立て役者
- ③ 有能な教育家
- ④ 信仰を真摯に問い求めた求道者宗門内では
- ① 近代教学の開拓者
- ② 宗門近代化の先駆者
- ③ 真宗同朋会運動の精神的支柱
- ④ 大谷大学の学祖

また批判的意見としては

その信仰は、自己内に充足を求め、主観主義・内観主義・退嬰主義・心がけ主義であり、「階級性」や社会問題に対する感覚の欠落、

その信仰実践は、修養によって煩悶憂苦から逃れようとする自力的、小乗的なものである。「衆生利益」を課題とした親鸞の信仰とは異質のものである、云々。

（「清沢満之批判の諸相」加来知之『教化研究』一二八号）

という見方があるとされます（これらの批判に対しては、久木幸男師の『検証 清沢満之批判』が応えている。）

避悪就善——清沢満之師

ところで私たちが一般に見ている清沢師の「絶対他力の大道」の

自己とは他なし、絶対無限の妙用に乗托して、任運に、法爾に、此の現前の境遇に落在せるもの即ち是なり

の文は、師の『臘扇記』から編集されて世に出されたものであり、その編集段階で一部言葉の付け加えと削除が為されたといえます。「現前の」は付け加えられたものであり、また初稿では、「絶対無限の我等に賦与せるものを樂しまんかな」の後に

絶対 吾人に賦与するに善悪の観念を以てし、避悪就善の意志を以てす。

所謂悪なるものも亦絶対のせしむる所ならん。然れども吾人の自覚は避悪就善の天意を感ず。これ道徳の源泉なり。吾人は喜んで此事に従わん。の文がありますが、普及版では削除されています。

寺川俊昭師は自著『自己とは何ぞや』の中で、避悪就善の意志は「信心の能动性」を表すものであり、これが普及版で削除されたのは非常に残念だと言っておられます。また同師は「乗托妙用」の言葉から、この一文は法の深信をあらわすとおっしゃっています。

大変口幅ったいことですが、しかし私はこの言葉の結びともいうべき「任運に法爾に此の現前の境遇に落在せるもの即ち是なり」の言葉は、極めて実存的表現であり宿業感覚に溢れた言葉であることから、機の深信の意味を持つと受け取れないか、と思っています。

以前、あることで安田理深師の色紙を頂いた時、そこに「落在現境」とあって強い印象を受けたものです。このことと『愚禿鈔』の第一深信（機）に「決定して自身を深信す」とあることを思い併せている訳です。

絶対他力の冒頭の文から、機法二種深信の信心の人の上に、信心の能动性として避悪就善の意志が語られている、と受け取れないだろうか。

また『臘扇記』の初稿では「自己とは何ぞや、是れ人世の根本的問題なり」とあるが、しばしば「人世の」を「人生の」として語られています。「人生の」では「人として生きる」という意ですが、「人世の」となると、人として世を生きるというように「世を生きる」ことを課題化した言葉になるといえます。清沢師の「自己」を問題とされるところには、単に自己を自己の枠内でとらえるのではなく、「自己」を生きる場としての「世・社会」が常に課題とされていたのでないでしょうか。師がよく道徳を問題にされるのも、そういう意識からでないか。清沢師に対して社会問題に対する感覚の欠落という批判は、「信仰と社会」という問題であり、清沢師からそのことをもつと実験し語っていただくには、清沢師の生涯はあまりにも短かったといえましょう。

（続く）





今村光章氏による講義（心の対話）

今回の研修は、アイスブレイクの手
法とその意義について知り、人を出会
わせる側、アイスブレイカーとしての
術を学ぶことが目的です。
参加者の多くはかねてからの顔見知
りでしたが、中には初対面かそれに近
い者もいます。さらには大学の先生の
講義ということで、最初私たちは少々
緊張気味、それこそ「氷」のように固
かったかもしれません。
しかし今村先生のやさしい語り口や
ユーモラスな振る舞いに、すぐに警戒
心は解かれ、出合いを演出するチェー

ン術やペー
術の具体例
を实践する
頃には、ど
の参加者も
すっかり笑
顔になって
いました。
人の心はこ
うやってほ
ぐされてい
くのか、引
き出されていくのかと身をもって感じ
ることができました。
私たちが心の中につくってしま
う「氷」は、自己正当化や他者攻撃、無
関心、逃避などのかたちをとって私た
ちの人間関係を脅かします。アイスが
砕かれて、もっと素直に心を通わすこ
とができたなら、私たちはより生産的で
創造的な人間関係を築いていけるのだ
ろうと思えました。

第十二組 長安寺 庭田龍信



講義（アイスブレイクの実践）

研修会報告①

「指導者研修会(アイスブレイク研修会)」開催

講師 今村 光章氏 (岐阜大学准教授)

会場 富山東別院会館

〔6/11〕

研修会報告②

「第五十三回児童研修大会」開催

テーマ 出会いからつながりへ

会場 黒部市

〔7/28〜30〕



流しそうめんの様子

た活動で、
とても盛り
上がった。
新しい試
みで不安を
抱えての開
催。問題点
も多々あっ

今年で五十三回目を迎えた
夏の児童研修大会。「出会い
からつながりへ」のテーマの
下、十二組を当番組とし黒部
のふれあい交流館「あこやの
」を拠点に開催された。今
年の大きな特色は、教区支援
ネットワークとの共同実施と
いう形で、「福島からの一時
保養」に参加される家族も交
えての活動を実施したことで
ある。子供たちは、スタッフ
が企画準備したゲームや「生
地の清水巡り」、竹を割っての「流し
そうめん」などの地元の特徴を生かし



参加者、スタッフの集合写真

たが、活動後
のアンケート
や意見の中に
「子供たちだ
けで自由に街
中を歩かせる
ことができな
くなってしまっ
ている福島で
の自分たちの
生活を、改め
て見直させら
れた」、「福島

の人たちと友達になれてよかった」、「富
山の人と友だちになれて一緒に遊べて
楽しかった」という声があったことは、
今後の活動の励みであり、足がかりに
もなる。こうした出会いが、様々な方
面で新たなつながりに発展していくこ
とが願われる。天候には決して恵まれ
ない三日間であったが、子供たちの元
気で賑やかな声が溢れた大会となった。

第九組 光圓寺 安川 潤

研修会報告③

「儀式作法講習会」開催

講師 釋まきち氏 昭彦あまひこ氏 (本廟部定衆)
会場 富山別院

【9/11】

九月十一日、富山別院に於いて本廟部定衆の釋氏昭彦氏を講師に、「儀式作法講習会」が行われました。この日参加された僧侶は四十九名。そのうち女性僧侶は九名の参加があり、男性中心の講習会、男

社会だなど感じました。



定衆による釋氏講義

前半は広間にて声明練習、後半は本堂にて模擬法要が行われました。模擬法要の合間には勤行作法の講習もあり、着座、起座、出退作法、和讃本の扱い方など、初めて経験することばかりで緊張しましたが、儀式執行の意義の心得の大切さを教えて頂き、私にとってとても有意義な講習会でした。

二〇一四年五月、富山教区・富山別院宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要が厳修されます。この御遠忌の讚仰期



声明練習の様子

間中の三月八日に、「女性による一座のおつとめ」を経験してみることとなりました。

今、教団の歴史をたどると、女性に僧侶の資格が与えられて七十数年が経っています。男性僧侶中心の教団、声明の音域も「男声」として成り立っています。今日まで得度した意味を問うことも無く、男性、女性

の役割分担の固定化が今なお刷り込まれているのではないのでしょうか。今回、御遠忌法要に身を置いてみる事によって何が見えていなかったのか確認し、女性僧侶の意識高揚を図る機会となることを願っています。

第十組 覺證寺 館 朋子

研修会報告④

「組門徒会役員研修会」開催

テーマ 門徒と寺のつながりを考える
会場 呉羽ハイツ

【9/18~19】

私にとって組門徒会役員研修会は、今回が初めての参加でした。テーマは「門徒と寺のつながりを考える」として、前回のものを踏襲しつつ、内容を深めていく事を願いと掲げられました。それぞれの代表からの発題、それらを受けての座談は、来る教区・別院御遠忌を見据えつつも、寺とは何か、門徒とは何かということについて語り合う場となりました。



発題の様子

「僧侶の伝えようという意志を感じても、言葉が難解である」という意見が多く、御遠忌の讚仰行事の「百人百話」ではこのことに留意したお

話を希望される声も挙がりました。私は在家から養子となつて僧侶になりまし

たが、「宗教離れ」という言葉は僧侶になつてから知り得た言葉です。かつては生活習慣のようになつた真宗の教えが、時代の変遷とともに失われていくのか、私たちがどのように向き合っていくのか。それが改めて問われているような機会となりました。



全体座談の様子

第十三組 持専寺 大伴慎介

※本誌2頁から富山別院報恩講話を掲載しております。

「富山別院報恩講」厳修

【10/6〜8】

会場 富山別院本堂

今年度の富山別院報恩講は、明年五月に勤まる富山教区・富山別院宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌を見据えての報恩講という位置付で行われました。従いまして、御遠忌の体制で執行されましたので、例年の報恩講であれば、式支配所が四人、承仕（会計）が二人なのですが、今回は式支配所を五人、承仕を四人としました。また、外陣役として今まで院外列座としてお願いしていました。五音会を増やすという意味で、五音会のメンバーを助音方として、外陣に出仕してもらいました。楽人の方々も、略式の楽ではなく本来の楽の次第に戻して雅楽を奏でてもらいました。



今年度の報恩講は丁度、井波別院の御遠忌と重なったため、前半の一昼夜を

信悟院鍵役に、後半の一昼夜を信明院鍵役に。ご出仕いただきありがとうございました。今回の報恩講について思ったことは、出仕、退出の作法がよく分からない方が多いように見受けられました。最近では内陣の堅置をイスに変える寺院も増えてきたせい、藪草履・草鞋の扱いを知らない方が結構いたように感じました。御遠忌に向けて、作法の講習、模擬法要を行いますので、御遠忌に出仕される方は是非ご参加ください。



富山別院報恩講の様子

第十組 應聲寺 和田 度

《会員を募集中です》

仏教青年会が発足しました!!

二〇一一年度より準備会として活動してまいりました仏教青年会が、今年度七月一日より「真宗大谷派富山教区仏教青年会」として正式に発足いたしましたのでご報告いたします。

この二年間、教区内での活動はもちろんです。本山で厳修された教如上人四百回忌法要「子どものつどいin東本願寺ー東日本震災復興支援ー」での食ブース開設や高山別院（岐阜県）、浅香地区（大阪府）で行われた「他教区交流研修会」への参加、「北陸連区ソフトボール大会」への参加など、全国の仏教青年会の皆さんと御縁をいただき交流を続けてまいりました。

越えて共にながっていきける場として、この会を大切にしていきたくと考えています。随時会員を募集しております。御門徒の皆さまには、ぜひ有縁の方にお声かけいただき御参加いただければ幸いです。

【連絡先】

富山教区仏教青年会
代表 桃井量純（十組 聞成寺）

TEL: 076 - 421 - 2786

Mail: mo_mo_pl_g@yahoo.co.jp

第十組 聞成寺 桃井量純

族の交流はさかんに行われてきました。あえて今、仏教青年会を起し上げるにあたって願うことは、これまでのような寺院だけの集まりではなく、御門徒の皆さまや、御門徒以外の方とも共に活動ができる会になってほしいということです。仏教の教えを大切に思う青年が職業や性別など、あらゆる垣根を





今回の紹介は、第十二組 願樂寺
寺報『ともしび』を発行して二十余年

『ともしび』第一号は平成四年五月一日に二百六十部発行した。第一面に「住職任命式・住職修習に参加して」と題して次のような拙文が載っている。

四月二十五日、現役在住職であった父が、満八十歳で胃がんの合併症のため、お浄土へ還って行ききました。父の手帳には「独来独去、無一隋者、身自当之、無有代者」という『大無量寿経』のお言葉が書かれていました。人は生まれるときも、この世を去るときも、たったひとりである。だれ一人として階うものはいない。人は自分でそれを受けていかなければならない。だれも代わってくれるものはいないという意味である。

父は熱心な聞法者でもありません。暁天講座も数十年にわたって

続けられ、一流の先生方をおまねきしてきた。今後、親の五十回忌法要を勤めるまでは、がんばりたいと言っていた父の遺志を受けついで、伝統ある願樂寺の法灯を、宗祖親鸞聖人のお心をいただきながら、門信徒の方々とともに、護持していくつもりである。

これが寺報を始めたきっかけである。



寺報『ともしび』第2面と第3面

現在、北は北海道の羅臼から、南は九州都城まで、門信徒の方々はじめ、お寺様方、知人、友人、教子など千二百部を、三か月毎に無料で差し上げている。

内容は、第一面には、平成十二年に富山新聞社から依頼されて布教の一環として執筆しているおくやみ案

内欄の「野辺の送り」の「一口説法」を載せている。第二面には「皆様からのおたより」を、第三面と第四面には「目で見るとしていろいろな写真を載せている。

平成十九年四月一日発行の『ともしび』第六十三号からは、写真をすべてカラーにして、印刷会社へ印刷を依頼してきたが、印刷代は十三万円である。県内外への郵送料は約六万円。三か月毎に十八万円の費用がかかる。黒部市内の門徒方には、地区ごとに配布していただいている。



寺報『ともしび』と永井宗聖願樂寺住職

「皆様からのおたより」を読んでいると、喜んでくださるのがよくわかる。なんとかして、第百号までがんばりたいと思う。

あるお寺の総代の方にも差し上げてきた。その方のお便りには、

願樂寺さんのように、費用は私が全部持ちますから寺報をだされたら、と申し上げたけど。不可能だということがわかりました。

と書いてあった。

第十二組 願樂寺 永井宗聖

宗議会議員に聞く

議員再選によせて

第十一組 正樂寺 土肥 人史



宗議会議員に再選され、その責任の重さをあらためて感じています。今回は

二十年ぶりに実質選挙となり、教区、組そしてご寺院の大切なご意見を聞かせていただき、宗門にかけられる願いと意見を数多くいただきました。「公議公論を尽くす」とは、まずそのような地元のお声を中央へしっかりとお届けすることから始まると考えています。

これまでの教化・財政機構を見直し、寺院活動そして宗門全体の活性化を目的として進められている宗務改革は、ただ単に変わるということではないはずですが、いつの時代も今を見つめ、宗祖親鸞聖人が開顕された念仏の教えとその精神に聞き帰るものと確信しています。そして、一人の人間としてまた

宗門人として果たすべき使命は何か、議論を尽くしていきたい。そのことが、同朋会運動の更なる推進につながると思います。
今後も御叱正と共に御意見等をお聞かせください。

「宗政の当事者」たらんことを願って

第十二組 照善寺 轡田 普善



今回の選挙で宗議会議員に選出させて頂きました。去る十月十日、十一日に召集されました臨時宗議会議に出席し、正副議長の選出と宗務総長の選出に投票を致しました。改めてその責任の重さを感じています。

選挙の際に申し上げましたように、社会情勢の急速な変化の中で宗門も変革を迫られていると感じています。こ

うした時こそ教区の願いを宗政へ届け、宗政の状況を教区の皆様にお伝えする取り組みが重要であると思っています。

具体的には「教区・組の改編」、「宗門財政の在り方」、「同朋会運動」といった課題が中央ではどの様に取り組まれているのかを教区の皆様にお伝えをし、議論を深めて参りたいと思っています。教区の皆様からも忌憚のないご意見をお寄せいただきたいと思います。

私達こそが「宗政の当事者」であると思いを大切に取組んで参ります。今後とも宜しくお願い申し上げます。

今回の宗議会議員選挙を振り返って

第一回「富山選挙区選挙管理会」(以下「管理会」)が八月二十二日に開催され、富山選挙区で選挙実施が決定した九月六日に第二回の管理会が開催された。その管理会において、①立候補者について、②投票管理者の指定について、③不在者投票立会人の日割、④開票日時決定、⑤立会演説会の有無・会所・日程・演説順位、⑥当選証書交付の日時の決定等々細部にわたって

を確認し決定した。

そして、立会演説会(九月十二日)、投票に関する打合せ会(九月十三日)、不在者投票(九月十五日、十六日)、選挙日(九月十七日)、終って即日開票、当選証書交付式(九月十八日)と短期間に度重なる出席を余儀なくされた管理委員の各位には大変御苦勞をおかけした。なかでも、これまで午前八時から午後六時までであった投票時間が午前七時から午後七時までに拡大され、十五日、十六日の不在者投票の立会人を管理委員で担当しなければならず、これも又大変だった。

しかし幸いにして何事もなく無事終わったことに感謝している。

最後に今回の投票総数及び投票率をお知らせしておきます。

選挙人総数	三六七人
不在者投票	一〇七票
選挙日投票	二〇四票
郵便投票	九票
無効投票	〇票
投票総数	三二〇票
投票率	八七・二%

選挙管理会会長

第十組 浄光寺 齊藤弘道

教区会議長 就任のご挨拶

富山教区会議長

第十二組 本傳寺 瀨上 一知



この度、轡田普善前教区会議長の宗議会議員への転出により、はからずも教区

会議長に就任することと相成りました。前議長の見解には及びませんが、皆様のご高配を賜りながら、微力ではありますが精一杯務めさせて頂きたいと思っております。

さて、二〇一四年五月には、富山教区・富山別院の「宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要」がひかえております。皆様と共に法要の円成に向け、努力する所存でございます。

教区内の皆様方おひとりおひとりが、宗祖の御遠忌を勝縁として、今一度本願念仏の御教えに、聖人の歩まれた仏道に自分自身を問い、歩み続けられんことを切に願います。

何卒よろしくお願ひ申し上げます。

転任のご挨拶

本廟部主事 日野 大修



この度、八月一日付をもちまして本廟部主事を拝命いたしました。

在任期間は一年十一ヶ月と短かったですが、富山教区の大事な施策を共に考え、歩ませていただき、貴重な経験をさせて頂きましたこと、幾重にも感謝申し上げます。特に教区・別院の御遠忌は目前に迫っており、途中で離富することに申し訳ない気持ちで一杯ですが、御遠忌円成に向けて皆様の力が一丸となられますことを願っております。

今後は、皆様にご指導いただきましたことを体として、微力ながら宗務に励んでまいりたいと思っております。略儀ながら書中をもって転任のご挨拶とさせていただきます。

着任のご挨拶

富山教務所主事 松尾 淳



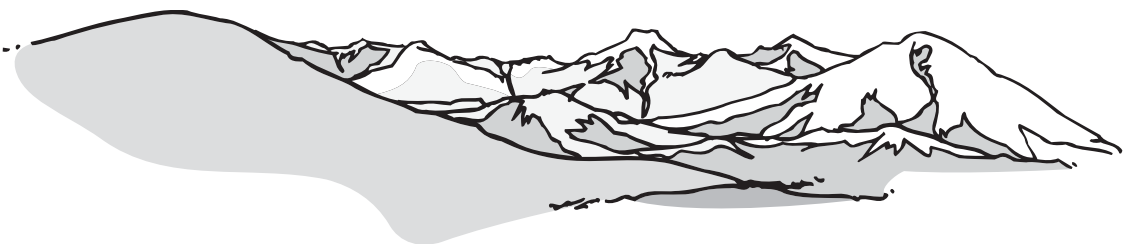
この度、八月一日付けで、富山教務所主事を拝命いたしました。松尾淳と申

します。出身は金沢教区（石川県かほく市）で、前任地は本山の研修部（同朋会館）で、主に教師修練・住職修習を担当させていただきました。

今回、初めて教務所への赴任となりましたが、赴任当初は、各組への巡回や宗議会議員選挙と多忙な日々を過ごし、改めて地方宗務の大切さを感じました。

また、明年の五月には教区・別院の宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌をお迎えすることですが、この大事な時期に着任いたしましたことに、身が引き締まる思いとともに、微力ながらその任を果たしてまいりたいと思っております。

皆様方のご指導を何卒よろしくお願ひ申し上げます。



教区だより

(敬称略)

教区役職者の改選

選挙管理会

(任期 二〇二三年七月一日～二〇二七年六月三十日)

- 第十組 浄光寺 齊藤 弘道
- 第九組 圓龍寺 圓山 達行
- 第十一組 真敬寺 原 教守
- 第十二組 善念寺 岩田 諦雄
- 第十組 常念寺 金山 弘明
- 第十三組 念興寺 瓜生 義堯

宗議会議員

(任期 二〇二三年九月十七日～二〇二七年九月十六日)

- 第十一組 正樂寺 土肥 人史
- 第十二組 照善寺 轡田 普善

選出教区会議員

(任期 二〇二三年十月三日～二〇二四年四月二十三日)

- 二〇二三年八月二十二日付
轡田 普善 教区会議員を辞任
- 二〇二三年十月三日付
淵上 一知 教区会議長に就任
藤岳 貴之 教区副議長に就任

安部 英憲 教区会参事会員

補充員①に就任

頼成 善享 教区会参事会員

補充員②に就任

※ 二〇二三年十月三日に開催された臨時教区会において、参事会員の藤岳貴之氏が副議長に互選されたため、補充員①の蜷川達氏が参事会員に繰り上がり、補充員②の安部英憲氏が補充員①に繰り上がり、新たに頼成善享氏が補充員②に互選されました。

教務所人事異動

富山教務所主事 日野 大修

本廟部主事に任命する

二〇二三年八月一日発令

研修部主事 松尾 淳

富山教務所主事に任命する

二〇二三年八月一日発令

得度式受式

(二〇二三年七月一日～二〇二三年十二月三十一日)

- 二〇二三年八月五日
第十一組 善行寺 茂利 晃正
- 二〇二三年八月五日
第十一組 善行寺 茂利 理恵
- 二〇二三年八月七日
第十組 蓮照寺 堀 定達

教化日誌

(二〇二三年七月一日～二〇二三年十二月三十一日)

7月

- 1日 教区同朋の会 総会
- 2～3日 全国教務所長会
- 4日 若坊守学習会
- 5日 全国教区会正副議長会
- 9日 割当審議委員会
- 9日 教区教化委員会 総会
- 10日 御遠忌委員会
- 10日 青少年実行委員会
- 11日 あいあう会
- 11日 教区監査
- 12日 御遠忌委員会 本部会
- 16日 御遠忌委員会 総会
- 17日 五音会
- 17日 社会教化小委員会
- 17日 雅楽全体会(興徳楽会)
- 18日 参事会・常任委員会
- 23日 坊守会役員会
- 23日 教区准堂衆会 修練会・総会
- 24日 教区会
- 25日 人生講座(第二回)
- 26日 教区門徒会
- 28日 教区門徒会
- 28日 第53回教区児童研修大会(黒部市)
- 29日 31日 暁天講座
- 31日 御遠忌委員会 教化推進部会
- 8月
- 1日 戦死・戦災死者追弔法要兼申経法要(八・一法要)
- 2日 正副組長会

5日 正副門徒会長会

6日 大谷大学同窓会公開講座

7日 御遠忌委員会

青少年実行委員会

あいあう会

御遠忌委員会 法要参拝部会

19日 20日 富山小会お寺に泊まろう会

20日 第十三組組会

21日 御遠忌委員会 本部会

22日 人生講座(第三回)

【講師 今泉温資氏】

第一回選挙管理会

26日 第十一組組会・組門徒会

坊守聞法講座

27日 第十三組組門徒会

27日 30日 大学生巡回(人形劇ほか)

28日 『如大地』編集委員会

30日 第九組組会

9月

- 2日 「女性によるおつとめ」実行委員会
- 3日 第十二組組会
- 3日 第九組組門徒会
- 4日 第十組組会
- 6日 若坊守学習会
- あいあう会
- 7日 第二回選挙管理会
- 7日 ハンセン病問題ふるさとネットワーク富山シンポジウム
- 8日 東日本大震災復興支援チャリティートーク&ライブ in富山
- 9日 第十二組組門徒会
- 10日 北陸連区ソフトボール大会(金沢教区)

11日	儀式作法講習会		
12日	第十組門徒会 総会		
12日	宗議会議員選挙 立会演説会		
12日	北陸連区坊守研修会		
15日	宗議会議員選挙 不在者投票		
17日	宗議会議員選挙		
18日	組門徒会役員研修(呉羽ハイツ)		
20日	富山小会彼岸会・相統講員物故者追弔法要		
22日	『如大地』編集委員会		
22日	富山別院秋季彼岸会		
25日	解放運動推進協議会		
26日	富山別院こどもまつり実行委員会		
	人生講座(第四回)		
	【講師 四衢 亮氏】		
	北陸連区推進員研修		
	「女性によるおとめ」発会式		
10月			
1日	富山別院報恩講式支配所打合せ・習礼		
3日	あいあう会		
6日	臨時教区会		
8日	富山別院報恩講		
9日	北陸連区教務所長会		
11日	子ども達への表現方法		
11日	声明作法講習会		
16日	真宗大谷派ハンセン病問題全国交流集会		
22日	『如大地』編集委員会		
23日	第五十三回仏教音楽研修会		
23日	全国教務所長会		
24日	全国教区教化委員長会合同会		
24日	全国主計会		
31日	全国駐在教導研修会		
11月			
5日	教区同朋の会報恩講		
6日	御遠忌委員会 法要参拝部会		
7日	式支配所会議		
7日	御遠忌委員会 本部会		
25日	富山教区真宗本廟御正忌報恩講 団体参拝		
27日	富山別院 宗祖親鸞聖人御正忌法要「ご満さん」		
29日	『如大地』編集委員会		
12月			
3日	若坊守学習会		
3日	北陸連区所長・主計会		
3日	子ども報恩講		
7日	「女性によるおとめ」声明講習会①		
10日	青少年教化小委員会		
13日	御遠忌委員会 教化推進部会		
16日	富山別院こどもまつり実行委員会		
16日	御遠忌広報実行委員会		
17日	コミュニケーション講座		
18日	【齋藤豊治氏】		
18日	御遠忌委員会 法要参拝部会		
20日	「女性によるおとめ」声明講習会②		
20日	教区坊守会声明講習会		
25日	解放あいあう合同学習会		
25日	『如大地』編集委員会		
26日	「真宗の基礎」講座		
26日	【池田勇諦氏】		
26日	御遠忌委員会 本部会		
26日	参事会・常任委員会		

編集後記

今号も、原稿をお願い致しました方々には、年暮、報恩講、教区・別院の宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要が差し迫る大変お忙しい中、『如大地』に御協力頂きありがとうございます。お陰様で今号を発行する事が出来たことをこの場を借りて御礼申し上げます。

年暮の時期になりお参りに行きますと、よく御年輩の方々が「年々、一年過ぎるのが早くなるように感じる」と言われます。私もそのように感じています。そこでよく私は「待ち遠しい事が少なくなったからですかね。子供は早く大人になりたい。大人は年を取りたくないとの違いですかね」と話をします。滝廉太郎の「お正月」という歌があります。「もういくつ寝るとお正月……」という歌いだしで、待ち遠しさを表しています。

そこでふと来年、御遠忌法要をお迎えするにあたり、ただ与えられた役割をこなし、ただ過ぎ去るのを待っている自分に気付かされました。「もういくつ寝ると御遠忌法要」と言う用語があるかもしれませんが、今回の御縁を大切にお迎えしたいと思います。

今後とも『如大地』について、御意見ご感想があればよろしくお願致します。

第十組 本行寺 生地 光